

## 吉田常吉先生年譜

明治四十三年（一九一〇） 誕生

三月十一日、東京市四谷区忍町十一番地（現在東京都新宿区四谷三丁目）に、父広吉、母秀の二男として生まれる。二姉あり、末子である。父は下絵師。本籍地、東京府豊多摩郡淀橋町大字角筭百五十六番地（現在東京都新宿区西新宿三丁目百五十六番地）。

大正五年（一九一六） 六歳

四月、東京市立四谷第二尋常小学校に入学。何歳の頃だったか、箒星をみた時の印象が強く心に残って、のちのちまで離れなかった。おそらく私が生まれた年、ハレー慧星が出現して、地球がその尾の中に入るとかで大騒ぎになったことを両親から聞かされ、子供心に恐ろしさにおののいたからであろう。小学生時代、「赤い鳥」が創刊されて愛読した。新宿駅付近が開けたのは大正十二年の関東大震災以後のこと、それ以前は四谷塩町（現在四谷三丁目）付近が繁華の中心であった。市電通りをはさんで、旬日おきに片側に夜店が出た。荒木町の角には毎晩のようにバイオリン片手の演歌師が現われ、新作の流行歌を歌っては、十銭・二十銭の歌の本を助手に売り廻らせた。大正時代の懐かしい風景であった。その荒木町の精米所の子供に、学芸会では落語を披露するおませな級友がいて、それにつれられて、うの丸横町の津守倶楽部に踊りをよく見に行ったものだった。後年考えるに、荒木町芸者の温習場であつたらしい。

大正十一年（一九二二） 十二歳

兄の大患のために受験勉強ができず、四月、四谷尋常高等小学校に進学。ある日、新宿の級友に誘われてその大廈に行き、日中、雨戸を締切り、大勢の姐さんと隠れん坊をして遊ぶ。帰宅して父に大いに叱責され、子供心に何の理由かわからなかった。先の津守倶楽部といい、この新宿の大廈といい、小学校時代、両親をはらはらさせた子供であつたようだ。

大正十二年（一九二三） 十三歳

四月、府立第六中学校（現在都立新宿高等学校）入学。学校は新宿御苑の一角にあり、創立二年目で生新の氣にあふれ、校長阿部宗孝先生は皇室中心主義・大家族主義を唱える精神主義者で、影響を受けることが少なくなかった。

二年生の時、スプリング付踏切板にて飛箱の跳躍に失敗、左手を捻挫骨折する大怪我を負い、以後多少おとなしくなる。後年、この怪我がもとで徴兵検査は丙種合格となり、徴集を免除される。三年生の二学期より、身柄を義兄宮良当壮に預けられる。義兄は宮内省図書寮勤務のかたわら琉球方言の研究に打込む篤学の士で、かつ謹厳そのものにて、不言不語のうち大いに悟らされるところあり。中学卒業までの約が結局は結婚するまで、義兄のもとに身を寄せる。

昭和三年（一九二八） 十八歳

四月、国学院大学予科に入学。ついで昭和五年四月、同大学学部国史学科に進学。植木直一郎・松本愛重の両教授、和田英松兼任講師（史料編纂官）に師事す。

同 八年（一九三三） 二十三歳

前年、卒業論文「平安朝時代における出産風俗の研究」（主査松本教授・副査和田講師）を提出し、三月二十日、卒業、総裁閑院宮賞を受く。かねて植木主任教授の推薦により維新史料編纂事務局（文部省所管）に勤務することに内定していたが、同月二十二日、同局に勤務して囑託を命ぜられ、編纂第一部（主任、維新史料編纂官森谷秀亮）に配属される。同局の編纂事業は、すでに「大日本維新史料稿本」四一八〇冊の編纂を終え、増補修正の段階であった。編纂第一部は、弘化三年正月より安政六年十二月に至る十四ヶ年の維新史料の蒐集編纂を担当し、入局した当時の仕事は、嘉永六年ペリール航の史料の増補修正であった。

維新史料編纂事務局の庁舎は、麴町区三年町（千代田区霞が関）の華族会館に隣接する地に、関東大震災後に設けられた木造建築であったが、この年の夏、虎の門の角に文部省の庁舎が竣成し、職員一同は新庁舎に移った。部屋の装飾におい

て、文部大臣室に匹敵する総裁室あり、職員六十余名は四階・五階・六階の三区画を占め、同局の華やかな時代であった。

同 十三年（一九三八） 二十八歳

六月より維新史料編纂事務局の業務は出版体制に入る。本来の業務である「大日本維新史料稿本」の出版、すなわち『大日本維新史料』の出版と、維新史料編纂会総裁金子堅太郎の強い要望によって『概観維新史』一卷・『維新史』六巻の出版とが計画され、職員は維新史料の出版担当と維新史の執筆担当に二分された。森谷編纂官のもとにあって『維新史』の草稿の執筆に従事する。『維新史』全六巻、昭和十六年十二月出版完了。

同 十六年（一九四一） 三十一歳

三月三十一日、維新史料編纂官補に任ぜらる。十二月八日、太平洋戦争勃発。

同 十七年（一九四二） 三十二歳

五月八日、維新史料編纂会官制廃止により退官、同日、文部省維新史料編修官補に任じ、大臣官房史料編修課勤務を命ぜられ、『大日本維新史料』の編修出版に従事する。従来の事務局は官房の一課に縮小され、森谷先生は同省教学局所管の『日本文化大観』の編修に移らる。

同 十九年（一九四四） 三十四歳

三月二十六日、本籍地の隣家、須永一郎の三女米子（大正八年十二月七日生）と結婚、新居を渋谷区幡ヶ谷本町に構える（のち本籍地の淀橋区角筈三丁目に移る）。以後二男二女を儲く。

七月一日、久我山電波工業専門学校講師を委嘱される（二十年五月三十一日辞任）。十月十八日、文部省維新史料編修官に任ぜられ、高等官七等に叙せらる。

この年六月、父広吉（七十五歳）を、十一月、母秀（七十一歳）を相ついで失う。杉並区宝昌寺に埋葬。

同 二十年（一九四五） 三十五歳

これより先、戦局の推移に鑑み、「大日本維新史料稿本」を長野県の上田繊維専門学校に疎開したが、さらに貴重史料・図書を護るために官庁疎開することになり、疎開先を福島県信夫郡福島経済専門学校（現在福島大学）に決し、前年よりその準備をすすむ。五月、夜間の大空襲により寓居焼失。六月、職員は東京残留組と疎開組とに分れ、福島に疎開す。学校は福島市郊外、信夫山の麓にあり、時に武蔵野で戦災にあった中島飛行機武蔵野製作所の工場が山腹に地下工場を造るため、昼夜兼行の突貫作業をつづけ、赤土が山腹を取り巻き、緑の山容が一変す。空襲が大都市より地方都市に移ろうとしている時、B 29の偵察にあえば発見される虞れあり、悔むも追いつかず。さらに貴重史料を飯坂温泉付近の農家の蔵を借りて疎開す。八月十五日、終戦の玉音放送に涙し、茫然自失す。たまたま福島師範学校教授として来福せる森谷先生に邂逅、久瀾を叙し、以来離福するまで往来す。

同 二十一年（一九四六） 三十六歳

前年福島に疎開中、官制改正により課は掛に縮小す。すなわち、七月、大臣官房史料編修課は廃せられ、維新史料掛として教学局に所属し、十月、社会教育局に移ったが、本年三月、さらに教科書局に移る。同月二十七日、文部省維新史料編修官を免ぜられ、三十一日、教科書局維新史料事務を嘱託される（奏任官待遇）。鉄道は進駐軍の管理下にあり、戦後の食糧難にて食糧物資の輸送を最優先としていたから、疎開史料の輸送などは思いもよらず、終戦後八ヶ月にして、ようやく上田・福島の疎開史料引揚げの手筈を整え、四月、帰京して北多摩郡調布町国領の仮寓に落ち着く。

同 二十三年（一九四八） 三十八歳

九月二十日、昭和二十二年政令第六十二号の規定により、教職適格と判定される。

同 二十四年（一九四九） 三十九歳

四月一日、文部省教科書局維新史料掛は東京大学史料編纂所に合併され、旧維新史料編纂事務局の稿本・副本・図書など

一切を挙げて同所に移管され、同所勤務を命ぜられ、六月一日、文部事務官（二級官）に任命される。

同 二十五年（一九五〇） 四十歳

宮良当壮との共同研究「琉球に於けるベッテルハイムの伝道事業及び語学研究に関する調査研究」により、昭和二十五年  
度・二十六年度文部省人文科学研究費補助を受く。

同 二十六年（一九五一） 四十一歳

三月二十七日、昭和二十二年勅令第一号により、公職適格と確認される。

同 二十九年（一九五四） 四十四歳

四月一日、文部教官（東京大学助手）に転じ、三十二年十月一日、同講師に昇任。

同 三十五年（一九六〇） 五十歳

三月、調布市下布田町五百十四番地（同市国領町六丁目二十番地九号）の新居に移る。

同 三十六年（一九六一） 五十一歳

四月一日、東京大学助教昇任

同 四十一年（一九六六） 五十六歳

十二月十九日、東京医科歯科大学昭和四十二年度進学課程入学試験問題作成並に答案採点委員を委嘱される（以後五十三  
年度まで在任）。

同 四十二年（一九六七） 五十七歳

この年放送のNHK大河ドラマ、大仏次郎原作「三姉妹」の時代考証を担当する。

同 四十四年（一九六九） 五十九歳

四月一日、東京大学教授に昇任。同月、日本歴史学会理事となる（四十九年六月評議員）、四月一日、明治大学講師を委

嘱される（五十年三月三十一日辞任）。十一月一日、国士館大学講師委嘱（辞任、同上）。

同 四十五年（一九七〇） 六十歳

三月三十一日、停年退職す。史料編纂所に在職すること二十一年、その間、維新史料部にあつて室長・部長として『江木鰐水日記』上下（大日本古記録）・『井伊家史料』一〜六（大日本維新史料類纂之部）の編纂に従事する。五月一日、立正大学講師を委嘱される（五十年三月三十一日辞任）。

同 四十六年（一九七一） 六十一歳

四月一日、国学院大学講師を委嘱される（四十八年三月三十一日辞任）。

同 四十七年（一九七二） 六十二歳

四月一日、青山学院大学大学院講師を委嘱される（五十六年三月三十一日辞任）。

同 五十年（一九七五） 六十五歳

四月一日、駒沢大学大学院・文学部教授に就任する。

同 五十四年（一九七九） 六十九歳

四月一日、大学院人文科学第二研究科日本史学専攻主任を委嘱される（五十六年三月三十一日まで）。

同 五十五年（一九八〇） 七十歳

九月十五日、同学知友の有志による古稀の賀筵に招かれる。

同 五十六年（一九八一） 七十一歳

四月一日、大学院人文科学第二研究科日本史学専攻主任・大学院人事委員会委員を委嘱される（五十八年三月三十一日まで）。

同 五十九年（一九八四） 七十四歳

五月一日、大学院人文科学第二研究科日本史学専攻主任を委嘱される（六十年三月三十一日まで）。

同 六十年（一九八五） 七十五歳

三月三十一日、停年を延長される（六十一年三月三十一日まで）。

同 六十一年（一九八六） 七十六歳

三月三十一日、停年を延長される（六十二年三月三十一日まで）。

# 吉田常吉先生著作目録

著 書

書 名

- 『村垣淡路守航海日記』(時事新書)
- 『万延元年遣米使節史料集成』第三卷
- 『万延元年遣米使節史料集成』第二卷〔共編〕
- 『松浦武四郎蝦夷日誌』上・下(時事新書)
- 『井伊直弼』(人物叢書)
- 『最上徳内蝦夷草紙』(時事新書)
- 『唐人お吉』(中公新書)
- 『明治維新と將軍・諸侯』(明治維新百年記念叢書)
- 『幕末政治論集』(日本思想大系56)〔共編〕
- 『吉田松陰』(日本思想大系54)〔共編〕
- 『松浦武四郎蝦夷日誌』上・下(新装改訂版)
- 『幕末下級武士の記録』(校訂・解題)

発行所

発行年月

時事通信社	昭和三四年 四月
風間書房	同 三五年一二月
同 右	同 三六年 九月
時事通信社	同 三七年 一月
吉川弘文館	同 三八年一〇月
時事通信社	同 四〇年一二月
中央公論社	同 四一年 二月
<small>神社本庁明治維新百年 記念事業委員会</small>	同 四二年 二月
岩波書店	同 五一年 四月
同 右	同 五三年一二月
時事通信社	同 五九年一二月
同 右	同 六〇年一二月



琉球におけるベツテルハイムの伝道―特に伝道冊子の投入を中心として―

唐人お林―善福寺におけるハリスの女性―

小栗上野介日記について

將軍家茂の死

戊辰戦争と小栗上野介

未発表の坂本竜馬の書翰について

徳川政権の崩壊

開国断行・將軍継嗣問題・大獄と桜田門外の変

桜田事変とその波紋

大獄と桜田門外の変

水戸老公徳川斉昭暗殺についての疑惑

長野主膳とその庇護者堀内広城・千稲父子

唐人お吉

小栗上野介

阿部正弘・井伊直弼・和宮・小栗忠順

桜田事変

徳川慶喜・禁裏守衛総督時代

斉彬とブレーン

『沖繩歴史研究』第二・三・四号 同四年五月―同四年七月

『日本歴史』第二二〇号 同四年九月

『人間創造』創刊号 同四年一〇月

『新訂増補国史大系』月報六五 同四年三月

『高柳光寿博士頌壽記念戦乱と人物』 同四年三月

『日本歴史』第二四二号 同四年七月

『上智史学』第一四号 同四年一〇月

『日本と世界の歴史』第一八卷 同四年二月

『茨城県史料』付録九 同四年二月

『日本の歴史』第一二卷 同四年二月

『茨城県史研究』第二五号 同四年三月

『日本歴史』第三〇〇号 同四年五月

『日本女性史』第五卷 同四年五月

『勝海舟と明治維新』 同四年一月

『書の日本史』第七卷 同五年四月

『水戸市史』中巻(四) 同五年一〇月

『徳川慶喜のすべて』 同五年五月

『島津斉彬のすべて』 (近刊)

日本史籍協会叢書解題（東京大学出版会）

『近衛家書類』	昭和四二年 五月	『嵯峨実愛日記』	同 四七年 二月
『中山續子日記』	同 四二年 七月	『三条家文書』	同 四七年 七月
『押小路甫子日記』	同 四三年 五月	『三条実万手録』	同 四七年 十一月
『朝彦親王日記』	同 四四年 六月	『橋本実梁陣中日記』	同 四八年 六月
『勸修寺經理日記』	同 四五年 五月	『中山忠能日記』	同 四八年 九月
『議奏加勢備忘』	同 四五年 七月	『万里小路日記』	同 四九年 六月
『九条家国事記録』	同 四六年 八月	『中山忠能履歴資料』	同 五〇年 一月
『久世家文書』	同 四六年一〇月		

日本史籍協会叢書別篇解題（東京大学出版会）

『野史台維新史料叢書』	八	「日記」一	同 四七年一〇月
同	右 一〇	「伝記」一	同 四八年 六月
同	右 三	「上書」一	同 四九年 五月
同	右 七	「書翰」二	同 四九年 八月
同	右 二六	「柳営沙汰書」	同 五〇年 二月
同	右 三七	「雜記」五	同 五〇年 三月
同	右 三八	「雜記」六	同 五〇年 三月

続日本史籍協会叢書解題（東京大学出版会）

『現代華族譜要』	昭和五十一年 二月	『維新前後実歴史伝』	同 五十五年 五月
『遠近橋』	同 五十一年 五月	『幕末実戦史』	同 五十六年 五月
『静寛院宮御日記』	同 五十一年一〇月	『稿本もりのしげり』	同 五十六年一〇月
『藤田幽谷関係史料』	同 五十二年一月	『竹亭 回顧録 維新前後』	同 五十七年 九月
『会津藩教育考』	同 五十三年 五月	『関八州名墓誌』	同 五十七年 九月
『開国始末』	同 五十三年 九月	『東京掃苔録』	同 五十七年 九月
『井伊大老茶道談』	同 五十三年一月		

随筆その他

越前湖北間の運河の開鑿と彦根藩の立場	史料編纂所研究会発表	昭和四十一年一〇月
坂本竜馬をめぐる動き	船橋市中央公民館歴史講座講演	同 四十三年一月
『東軍』から見た明治維新	サンケイ新聞	同 四十三年一〇月
安政大獄の系譜	第三八回山口県地方史研究会記念講演	同 四十三年一〇月
開国と攘夷の時代	新異国叢書『エルギン卿遣日使節録』月報	同 四十三年一月
井伊直弼 唐人お吉	東京新聞『新日本の人物像』	同 四十四年一月
白河楽翁公と松平家	江東区白河町靈巖寺墓前講演における速記録	同 四十五年 六月
姉妹都市 高松と彦根	『日本歴史』第二六七号	同 四十五年 八月
最後の専制者・井伊直弼	『文芸春秋』臨時増刊『目で見る日本史・明治維新』	同 四十八年一月

- |                             |                        |   |        |
|-----------------------------|------------------------|---|--------|
| 書跡を通して見た維新の人びと              | 「明治維新百人」(「別冊太陽」五)      | 同 | 四八年一月  |
| 家慶・家定・家茂・慶喜                 | 「徳川十五代」(「別冊太陽」八)       | 同 | 四九年九月  |
| 禁門の変・薩長連合・戊辰戦争              | 『図説西郷隆盛』講談社            | 同 | 五二年三月  |
| 天神の盃さばき                     | 「日本歴史」第三五三号            | 同 | 五二年一〇月 |
| 実説黒船騒動記                     | 「かわら版・新聞」(「太陽コレクション」六) | 同 | 五三年五月  |
| 洋妾秘聞                        | NHK『歴史への招待』一〇          | 同 | 五五年一二月 |
| 村山可寿江(歴史への旅・謎の美女たち)         | 「グッデイ」第一三号             | 同 | 五八年九月  |
| 唐人お吉(同 右)                   | 「グッデイ」第一四号             | 同 | 五八年一〇月 |
| 大仏次郎<br>記念会主催「天皇の世紀」<br>初月給 | 歴史講座(講演)               | 同 | 五八年一〇月 |
| 岩亀楼遊女喜遊(歴史への旅・謎の美女たち)       | 「日本歴史」第四二八号            | 同 | 五九年一月  |
| 幾松(同 右)                     | 「グッデイ」第二六号             | 同 | 五九年一〇月 |
| 災難除のお札                      | 「グッデイ」第二七号             | 同 | 五九年一月  |
|                             | 「日本歴史」第四五一号            | 同 | 六〇年一二月 |